(3) 県立新城有教館高等学校

ア　研究の経過

月日	活動内容
６月12日	第１回研究協力校連絡会　会場：総合教育センター 研究の概要，研究方針の説明 新城地区研究協力校代表委員と情報交換及び方向性についての共通理解
６月18日	本研究に関する校内ガイダンス（職員会），校内研究組織の編制
６月25日	全教員を対象にカリキュラム・マネジメント検討用シートの配付及び記入
７月13日	カリキュラム・マネジメント検討用シートの集計，全教員に結果のフィードバック
夏季	全教員で現状把握シート，ＳＷＯＴ分析シートに関するグループワークの実施
８月28日	第２回研究協力校連絡会（新城地区）　会場：県立新城有教館高等学校 資質・能力の育成に向けた取組についての協議，授業参観，校内見学
９月３日	現職研修（カリキュラム・マネジメント検討用シートの分析報告，各グループリーダーによる現状把握シート及びＳＷＯＴ分析シートの発表，研究担当者によるまとめ）
10月30日	第３回研究協力校連絡会（新城地区）　会場：新城市立八名中学校 各校の資質・能力の育成に向けた実践についての協議，発表会資料の検討
11月20日	第４回研究協力校連絡会　会場：総合教育センター 発表会に向けてのリハーサル，本年度の研究のまとめについて（研究紀要）
11月26日	校内研究班で育てたい生徒像，身に付けさせたい資質・能力の取りまとめ
11月27日	第60回総合教育センター研究発表会（中間報告）
２月16日	第５回研究協力校連絡会　会場：総合教育センター 本年度の研究のまとめと次年度への取組について

イ　過程で見えてきたこと

カリキュラム・マネジメント検討用シートにおいて相対的にスコアの高かった要素はリーダーシップである。管理職や主任だけでなく，立場や役割に応じて多くの教員が個々で努力していると考えられる。しかし，組織構造やカリキュラムのＰ（計画），Ｃ（評価）は全体的にスコアが低かった。また，小項目で見ると教員間の共有，教科・学年間の連動，授業改善という点のスコアからも課題のあることが分かった。つまり，個人レベルの活動が組織全体で共有できていないこと，授業改善が進んでいないことが浮かび上がった。

現状把握，ＳＷＯＴ分析のグループワークでは本校の強みと弱みが教職員間で共有できた。本校の強み・プラスの要素として「生徒の人柄がよい」「多様・選ぶ活動の多さ」「文理・専門の壁が生徒にない」「環境・施設・設備」「地域・保護者が協力的」「部活動や行事で頑張れる生徒が多い」「若い先生が多い・教師の専門性も多様」「多様性や互いを認め合う心」などが挙がった。一方，弱みやマイナスの要素としては「主体性・積極性に欠ける」「競争意識に欠ける・目線が低い」「教職員の共有不足・足並みが揃わない」「系列や科目選択などにかける時間が短い」「文理系・専門系に共通の指導の徹底がしづらい」などが挙がった。

これらの強みと弱みを踏まえ，本校の育てたい生徒像を「自分の可能性を信じ努力を続ける生徒」「故郷を愛し地域で活躍できる生徒」「課題意識をもち，常に自身を更新できる生徒」として全教職員で共有した。育てたい生徒像を目標とし，自校生徒に身に付けさせたい資質・能力は「主体性」を核に，「向き合う力」「気付く力」「伝える力」と定めた。

ウ　「社会に開かれた教育課程」を実現するための，資質・能力を意識した実践

生徒に身に付けさせたい資質・能力を育成するため，１年生の「産業社会と人間」や２年生の「総合的な探究の時間」を活用し実践した。「産業社会と人間」では，地域に根ざした企業の講話，保護者・社会人の目線でＰＴＡと連携した講話（**資料１**）などを実施した。新聞づくりの活動ではクラス・系列横断のグループを編制し，地域・課題意識・主体性・気付く力・伝える力などをキーワードに活動した（**資料２**）。取材活動も行い，社会や地域との接点をもたせ，多くの人や考えに触れることができた。出前講座では，各自の進路希望から講座を選び受講するだけでなく，聴講した内容を見やすくまとめること，他者に分かりやすく伝えることなども行った（**資料３**）。

【資料１　ＰＴＡ連携】

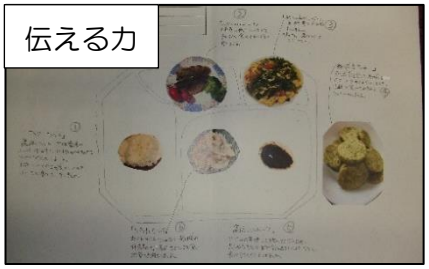
【資料２　新聞づくり】

【資料３　出前講座】

「総合的な探究の時間」では「道の駅もっくる新城」と連携し，弁当づくりに取り組んだ。具体的な方法による地域貢献，解が一つでない課題へ主体的に取り組むことなどが目的である。向き合う力・気付く力・伝える力を伸ばすことをねらいとしたが，予想以上に生徒の主体的な取組が見られた。ここでも，クラス・系列横断のグループを編制し打ち合わせを行った（**資料４**）。夏季休業期間には，生徒が各自の試作をワークシートにまとめて中間報告を行い（**資料５**），駅長から評価をいただき，最終報告の後で地域貢献に関する講話も実施した。クラス内発表では，発表生徒だけの活動とせず，補助生徒が情報機器を操作し，生徒間で相互評価をするなど，主体性も意識した実践となった（**資料６**）。

【資料４　打ち合わせ】

【資料５　中間報告】



【資料６　クラス内発表】

エ　成果と今後に向けての見通し

今年度の研究の成果として，多くの教職員が現在の教育活動を見直す契機となったことが挙げられる。育てたい生徒像や身に付けさせたい力などについて若手教員を中心に話し合う機会が増えたことで，少しずつではあるがカリキュラム・マネジメントに対する関心は高まっている。しかし，文理系（普通），専門系（農業・商業・家庭）の２系を有する本校では，全体に浸透しているとはいえず，まだまだ消極的な姿勢の教員もいるのが事実である。

今後グランドデザインを完成させ，研究班が率先して身に付けさせたい資質・能力を意識した実践を行っていく予定である。既に班内では教科横断や研究授業等のアイデアを膨らませており，その他の教員や諸活動にも広がっていくことを目指している。さらに，次年度は地域と関わる実践を体系的に整備することで，学年間の連動もより円滑になると期待している。そして，その延長線上に新城地区の小中高が目指すべき連携の手法について足がかりが見えてくるのではないかと考える。